

特別支援学校の修学旅行同伴ボランティアの体験

—福祉を学ぶ大学生の学び—

上田恵理子¹・片岡 妙子²・三好 弥生³

(2016年9月23日受付, 2016年12月14日受理)

Experience of volunteering by accompanying a special-needs school's class trip

Learning of the college student who learns welfare

(Received : September 23, 2016, Accepted : December 14, 2016)

Eriko UEDA¹, Taeko KATAOKA², Yayoi MIYOSHI³

要 旨

本研究は、4年制大学で福祉を学ぶ学生が、特別支援学校の修学旅行に同伴するボランティアを通して何を学び、その体験がどのように活かされているのかを調査したものである。

ボランティアに参加した学生12人に対して、面接調査を実施し、逐語録から抽出された75コードをもとに8カテゴリーを生成した。それぞれのカテゴリーの関係には、ボランティアを体験して得た学びを、将来へと繋げていくプロセスがあることが分かった。

そして障害児と共に社会参加する中で、保護者との関わりや教員が教育・指導する姿を知り、体験したことを内省することで、支援だけではない視点や、障害に対する新たな気づきを経て、進路の幅の広がりを得ていることが示唆された。

キーワード：特別支援学校、修学旅行、ボランティア、大学生、体験学習

Abstract

This research investigates what students in a four-year college studying social welfare learned from volunteering by accompanying a special-needs school's class trip and how they draw on this experience.

Interviews were conducted with the 12 students who volunteered. Based on the 75 codes extracted from this interview survey, eight categories were created. We discovered from each of these categorical relations that the students went through a process in which the lessons they learned through volunteering developed into future careers.

In addition, this study indicates that during the students' social engagements with children with disabilities, students learned ways of getting involved with the children's guardians and teachers' attitudes toward teaching and instructing. Further, by self-reflecting on their experiences, they have widened their range of career options by acquiring perspectives not only related to providing support but also by gaining a new awareness about disabilities.

Keywords : special-needs school, class trips, volunteering, college students, experiential learning

-
- 1 高知県立大学社会福祉学部社会福祉学科・助教・修士（人間科学）
Department of Social Welfare, Faculty Social Welfare, University of Kochi, Assistant Professor (Master of Human science)
 - 2 高知県立大学社会福祉学部社会福祉学科・助教・修士（看護学）
Department of Social Welfare, Faculty Social Welfare, University of Kochi, Assistant Professor (Master of Nursing)
 - 3 高知県立大学社会福祉学部社会福祉学科・講師・博士（社会福祉学）
Department of Social Welfare, Faculty Social Welfare, University of Kochi, Lecturer (Ph.D.)

I. はじめに

A 県にある福祉を学ぶ大学では、毎年 A 県内にある複数の特別支援学校が実施している、日帰らないし宿泊の修学旅行にボランティアとして同伴している学生がいる（以下、修学旅行同伴ボランティア）。修学旅行同伴ボランティアへの参加には、大学側よりボランティアの呼びかけをし、自発的な参加を募っている。

このボランティアは、特別支援学校の教員らとともに、修学旅行中の障害児をサポートするものであり、そのサポートの内容は障害児個々によって異なっている。

修学旅行同伴ボランティアを体験した学生の多くは、とても生き生きとした表情で、「すごく楽しかった」「また行きたい」という前向きな発言をしており、年に一度のボランティアであるが、連続して希望し参加している学生もいる。学生は、修学旅行同伴ボランティアを経て、学んでいる事や感じていることが多くあると考えられる。しかしながら、彼らにとってどのような体験が学びとなり、成長につながっているのかは明確になっていない。

松尾は（2011：2）、経験からの学びについて「挑戦的な目標に取り組み、自分のあり方を振り返りながら、仕事の中に意義ややりがいを見つければ、人は経験から多くのことを学ぶことができ」と述べている。

本研究では、修学旅行同伴ボランティアを通して、学生は何を学び、その体験がどのように活かされているのかを明らかにする。

II. 研究背景

1 特別支援学校とその生徒の現状

特別支援学校とは、平成19年4月より、盲学校、聾学校、養護学校（知的障害者、肢体不自由、病弱・身体虚弱）が特別支援学校という名称に変更になり、障害の程度が比較的重い子どもを対象として専門性の高い教育を行う学校である。幼稚園から高等学校に相当する年齢・段階の教育を、特

別支援学校のそれぞれ幼稚部・小学部・中学部・高等部で行い、対象は視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱と様々な障害を有する子どもとする。

文部科学省が作成した特別支援教育資料によると、平成27年度の特別支援学校・特別支援学級の在籍幼児児童生徒数は、137,894人で、内訳は知的障害77,789人、肢体不自由11,473人、聴覚障害5,801人、視覚障害2,876人、病弱2,453人、複数の障害をもつ幼児児童生徒は37,502人である。複数の障害をもつ者のうち、33,105人（88.3%）が知的障害を有しているとされている。

また、調査対象地域の A 県内には、平成21年度時点で、14校の特別支援学校（県立11校、公立1校、国立1校、私立1校）が設置されており、幼児・児童・生徒の総数は、861人である。

2 学生のボランティア活動の意義

日本においてボランティアという言葉は、1970年代以降、一般の人々に普及しはじめ、1995年の阪神・淡路大震災では、約130万人ものボランティアが活躍し、「ボランティア」という言葉が一気に世間へ浸透した。

2002年に文部科学省中央教育審議会が「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」を答申し、18歳以降の青年が様々な分野において奉仕活動を行える社会の仕組みづくりが進められた。

18歳以降の青年にとっての奉仕活動・体験活動の意義は、社会人に移行する時期ないしは社会人として歩み出したばかりの時期に、地域や社会の構成員としての自覚や良き市民としての自覚を、実社会における経験を通して確認することができることにある。また、青年期の比較的自由でまとまった時間を活用して、例えば、長期間の奉仕活動等に取り組んだり、職業経験を積んで再度大学等に入り直したりなど、実体験によって現実社会の課題に触れ、視野を広げ、今後の自分の生き方を切り開く力を身に付けることができるとされて

いる。また、特に、学生にとっては、何を目指して学ぶかが明確になって学ぶ意欲が高まり、就職を含め将来の人生設計に役立てることができる（中央審議会：2002）。

3 学生ボランティアの先行研究

学生ボランティアの研究は、2002年頃より盛んになされている。主なものは、ボランティア対象が障害者・児童・高齢者に分けられ、その活動報告やボランティア参加の意義などに関するものである。

学生のボランティア活動と社会的スキルの変化に関する考察を行った馬場ら（2005）は、学生はボランティアの経験を通して、自分の行動を振り返り分析して、何が足りていないか自己評価しながら援助のスキルを高め、ボランティア活動を続ける事で、自己効力感を始めとする内面の変化が起こりやすくなり、ボランティア観のみでなく人間観までも変わっていくことも示唆されると述べている。

一方、4年制大学で福祉を学ぶ学生を対象としたものや、旅行に同伴するなど長時間一緒に過ごすボランティアから得た学びを明らかにした先行研究は少なかった。

その中で、高橋ら（2014）は、福祉を学ぶ学生が、障害者の福祉施設・専門機関での実習だけでなく「旅行」という非日常的な場において楽しみながら学ぶことは、障害の理解や現場で働くことへの不安の解消につながるとともに、障害のある人の生活を広い視野で考える力も身に付くと述べている。

また、福祉を学ぶ学生ではないが、作業療法学専攻学生を対象とした、障害者の旅行へボランティアとして参加したことによる成果をまとめた津軽谷ら（2010）は、学内の授業やカリキュラム実習では、ある限定された時間の日常生活場面のみを観察・分析することが多いが、ボランティアとして一日を通し障害者と共に過ごした旅行だからこそ、一連の日常生活活動の中での障害者自身

の工夫や考え方および作業療法士等のスタッフの介助方法や工夫を体感することができると述べている。そして、障害者とのコミュニケーションを含めて、障害者に対するイメージや作業療法の仕事がどういうものかということの具体的な理解へとつながり、今後、作業療法士を目指す過程において非常に意味のあるボランティア活動になったと明らかにしている。

このように先行研究では、学生はボランティアを行うことで、自分の行動を振り返り評価しながら自分に足りないものを認識し、人間観までも変化していくとされている。また、「旅行」という非日常的な場において、楽しみながら学ぶことで、障害者やその支援の理解のみならず、視野を広げ、具体的に専門職としての自身の将来を想像しやすくなると述べている。

III. 研究目的・意義

先行研究では、ボランティアを通して人間観の変化や視野の広がる効果について述べられているが、福祉を学ぶ学生が障害児と共に旅行をして、得られる学びや体験に焦点を当てたものは見当たらなかった。

本研究は、特別支援学校の修学旅行に日帰りから三泊四日までのボランティアに同伴したことのある4年制大学で福祉を学ぶ学生（以下、学生と称する）が、障害のある子どもの修学旅行同伴ボランティアを通して、何を学び、その体験がどのように活かされているのかを明らかにすることを目的とする。

「修学旅行」という日常とは違う環境と、障害児とともに長時間過ごすボランティア体験の学びを明らかにすることは、今後、福祉を学ぶ学生の学びに関する基礎的な資料となり、得られた知見は実際の教育の中に活かすことができると考える。

IV. 方法

1 研究方法

調査方法は、半構造化面接を用いた。調査協力者の了承を得た上で、インタビュー内容を録音機器に録音した。

質問内容の詳細は、①ボランティアに参加を決めた時の心境、②修学旅行中に学んだことや感じたこと、③ボランティアを終えた後の心境の変化、④修学旅行同伴ボランティアの体験と大学での学びとの関連について思うこと、⑤全体を通して一番の学びなど、5項目である。

分析は、質的分析ソフト MAXqda を使用し、語られた内容をコード化した。そして、それらのコードを、比較検討しながら分類・抽象化作業をすすめる、コードからカテゴリーを生成した。

2 調査対象者の概要

2015年度、特別支援学校の修学旅行に同伴した、社会福祉と介護福祉を学んでいる大学生、1回生3名、2回生1名、3回生8名の12名である。性別は、男性5名、女性7名である（表1）。

3 調査実施期間

2016年の4月から5月に行った。インタビュー時間は一人30分から1時間程度である。

V. 倫理的配慮

調査対象者に対し、調査の開始前に文書および口頭により、研究目的、調査内容、調査協力に伴う利益・不利益について説明を行い、調査の同意後も、途中中断しても不利益を被らないことを伝えた。同意書にサインを得られた場合、調査を実施した。

本研究は、高知県立大学社会福祉研究倫理審査委員会（承認番号 社研倫15-60号）の承認を得て行なった。

表1 調査対象者一覧

	学年	性別	日数	行き先	対象生徒
1	1回生	女	一泊二日	県外	中学生(男)
2	1回生	男	二泊三日	県外	高校生(男)
3	1回生	男	二泊三日	県外	中学生(男)
4	2回生	女	日帰り	県内	中学生(女)
5	3回生	男	二泊三日	県外	小学生(男)
6	3回生	男	二泊三日	県外	中学生(男)
7	3回生	男	三泊四日	県外	高校生(男)
8	3回生	女	二泊三日	県外	高校生(女)
9	3回生	女	二泊三日	県外	高校生(女)
10	3回生	女	一泊二日	県内	小学生(女)
11	3回生	女	一泊二日	県内	小学生(女)
12	3回生	女	日帰り	県内	高校生(女)

VI. 調査結果

1 コードおよびカテゴリー

逐語録からコード化するにあたり、「経験によって、知識、スキル、見方に変化が生じた出来事」に焦点を当て、分析を行った。その後、抽出したコードは、MAXqda を使用して、カテゴリー化を行った。データから生成されたコードは75、サブカテゴリー21、カテゴリー8であった(表2)。

本文中では、カテゴリー【 】、サブカテゴリー《 》、コード[]として表記している。

また、ボランティアの対象児童・生徒のことを「生徒」と表記する。

1) カテゴリー1:【関わりの難しさ】

学生は、重度の障害を有する生徒に対し、[話しかけても反応がない] ことなどから、彼らとの《意思疎通の難しさ》を感じていた。また、[何をするか予測できないので目を離すことができない] など《接し方に戸惑い》を覚えていた。そして、ボランティアに参加しているにもかかわらず、《どうやればいいのかわからない》と、まず【関わりの難しさ】の壁にぶつかっていることが伺えた。

表2 カテゴリーとコード一覧

【カテゴリー】	《サブカテゴリー》	【コード】
1. 関わりの難しさ	どうやればいいのか分からない	1 話しかけていいのか気を使う
		2 相手の表情を見ながらやってもどの位の強さでやればいいのか分からない
		3 思ったとおりに自分の身体が動かない
		4 手が勝手に動いたり普段の演習とは違う
	接し方に戸惑う	5 事前に調べていた症状と全然違って驚いた
		6 実際に会ってみて自閉症症状の大変さが分かった
		7 生徒からのスキンシップの多さに驚いた
		8 目を離すと何をするか予測できないので目が離せない
		9 スイッチが入ったような突然の行動に戸惑う
		10 外の刺激を受けて興奮
	意思疎通の難しさ	11 話しかけても反応がない
		12 楽しんでいるかどうか読み取るのが難しかった
2. 障害児と共に社会参加	日頃には見えない生徒の姿	13 生徒が発する言葉を理解できず自分の言葉も伝わらない
		14 バレードに集中するとパニック症状がでない
		15 その土地の料理を食べて笑顔になった
		16 楽しい雰囲気でご飯がすすむ
		17 家族と一緒にリラックスした様子
		18 一日を通して様子がみられた
		19 旅館の料理よりレトルトカレー
		20 コンセントの位置まで確認する必要性を知る(徹底した準備)
	非日常生活の支援を通して	21 先生、家族、生徒がいる空間を新鮮に感じた
		22 生徒と一緒に行動してジロジロみられた
		23 障害者に対する周囲の反応が気になった
3. 教員が教育・指導する姿	生徒のために「叱る」ということ	24 子どものことを思っで厳しくすることも必要
		25 駄目なことはダメだとしっかり怒る
		26 怒った後、反省していれば対応を切り換える
		27 気さくな関わり方でも良いとわかった
	一人の人として向き合っている	28 教員は生徒を一人の人として、障害を個性としてみている
		29 一対一で向き合っていると知った
		30 生徒の意見を受容していた
		31 職員が話しかけると生徒が笑っていた
	生徒の教員への信頼	32 叱っても信頼されていた
		33 生徒と教員との深い関係性を知った
		34 生徒の家族、特に母親の強さを知った
4. 保護者の存在	子どもにとって保護者の存在の大きさ	35 親子の信頼関係の強さを見て、親には勝てないと思った
		36 保護者の思いが分かった
	生徒への保護者の思い	37 障害をもっている親としての接し方は自分たちの親と同じ
		38 保護者の視点をより考えられるようになる
		39 保護者との関わりが一番の勉強
		40 保護者と関わることでその子の背景がみれる
	保護者への支援の重要性	41 家族への支援も大切だと思った
		42 子どものサポートももちろんだか、家族のサポートの大事さを改めて感じた
		43 「ありがとう」と口をうごかしてくれる
		44 時間の使い方が違うことが分かった
5. 支援だけではなく視点	生徒の変化に喜びを感じる	45 3日関わって表情も変わった
		46 こんな風に笑えたんだって分かった
		47 一番仲良くなったのは最後の日
		48 言葉では難しくても目線を合わせると笑顔になる
		49 初めて意思疎通ができた
		50 危険なときは学生でもしっかり怒るべき
		51 こちから話しかけていくことが大事
	成長期にふさわしい関わり方	52 自分たちが小中学生時代にして貰った接し方をする
		53 年齢に合った接し方が必要だと思った
		54 やれることはやれるという事
6. 障害に対する新たな気づき	障害者の見方が変わる	55 障害があるからと決め付けるのは良くない
		56 障害をもつ人への考えが一変する
		57 ボランティアに行く前は障害に対するいいイメージが無かった
		58 障害を持っている子どものイメージが変わった
	障害への興味関心の拡大	59 ダウン症生徒と関わり自分でも調べてみた
		60 より障害分野に興味を持った
		61 障害への知的関心が増した
		62 障害というものの捉え方が広がった
		63 自分たちの思う旅行とは違う意味がある
		64 その時その時を一生懸命楽しむ
7. 修学旅行の意義	生徒の成長発達	65 修学旅行は生徒のみならず家族にとっても大切な時間
		66 障害のある子と一緒に親御さんも楽しんで欲しい
	家族だけでは実現できない時間	67 なかなか旅行にいけない生徒の修学旅行実現に関われてよかった
		68 見聞を広げる貴重なチャンス
	学生にとって貴重な体験	69 すごいことをお手伝いできた
		70 刺激を受けて成長している時に立ち会えた
		71 障害者分野で働きたいという気持ちが強くなった
		72 やっぱ障害分野に携わりたい
		73 障害者だけでなく障がい児もあんな
		74 学校で働くのも楽しそうだった
8. 進路の幅の広がり	障害分野への志望の高まり	75 将来、特別支援学校への教員になるのもいいと思った
	障害児教育への興味発生	

2) カテゴリー2:【障害児と共に社会参加】

学生は修学旅行に同行する中で、[パレードに集中するとパニック症状がでない][その土地の料理を食べて笑顔になった]など《日頃には見えない生徒の姿》に気づいていた。また、修学旅行準備のために[コンセントの位置まで確認する必要性]など《非日常生活の支援を通して》知りえた。さらに、学生は障害児と行動を共にする事により[障害者に対する周囲の反応が気になった]と、《見られる側の違和感》も体験しており、これらの【障害児と共に社会参加】することが、日頃の実習では体験できない学びとなっていた。

3) カテゴリー3:【教員が教育・指導する姿】

学生は、特別支援学校教員(以下、教員と称する)が生徒に関わる様子の中から、[駄目なことはダメだとしっかり怒る]という一面を見て、[子どものことを思って厳しくする事も必要]であり《生徒のために「叱る」ということ》の重要性を感じていた。同時に、学生は教員が生徒に対して《一人の人として向き合っている》こと、[叱っても信頼されていた][生徒と教員の深い関係性を知った]という《生徒の教員への信頼》を感じていた。

学生は【教員が教育・指導する姿】から、教育や指導の必要性を学ぶとともに、人と人との関わりの深さを学んでいた。

4) カテゴリー4:【保護者の存在】

修学旅行中、学生は生徒と生徒の家族と一緒に居る時間を共有する中で、[障害をもっている親としての接し方は自分たちの親と同じ]という《生徒への保護者の思い》を知り、[生徒の家族、特に母親の強さを知った]といった《子どもにとって保護者の存在の大きさ》を感じていた。これらの経験から、学生は[家族への支援も大切だと思った]という《保護者への支援の重要性》に気づき、社会福祉や介護福祉の実習では接する事の少なかった【保護者の存在】を再認識し、学び

を得ていた。

5) カテゴリー5:【支援だけではない視点】

学生は生徒への関わりを続ける中で、[言葉では難しくても目線を合わせると笑顔になる][3日関わって表情も変わった]といったことに気づき、《生徒の変化に喜びを感じる》ようになっていた。また[年齢に合った接し方が必要だと思った]と捉えており、《成長期にふさわしい関わり方》が大事であると意識しながら同行し、【支援だけではない視点】を持つようになっていた。

6) カテゴリー6:【障害に対する新たな気づき】

当初、[ボランティアに行く前は障害に対するいいイメージが無かった]という学生も、修学旅行の同伴を通して、[障害があるからと決め付けるのは良くない]と考え《障害者の見方が変わる》ようになっていた。さらに、障害者に関わる事により[障害に対する勉強をもっとしたい][障害というものの捉え方が広がった]という《障害への興味関心の拡大》につながり、【障害に対する新たな気づき】を得ていた。

7) カテゴリー7:【修学旅行の意義】

修学旅行は、重度の障害を有する生徒にとって[自分たちの思う旅行とは違う意味がある]、生徒は[その時その時を一生懸命楽しむ]といった《生徒の成長発達》の機会となっていると学生は感じていた。同時に、この修学旅行が《家族だけでは実現できない時間》とも認識していた。また[なかなか旅行に行けない生徒の修学旅行実現に関われてよかった]と感じており、《学生にとって貴重な体験》となっていた。学生は【修学旅行の意義】は、生徒のみならず、保護者、自分自身それぞれにあると捉えていた。

8) カテゴリー8:【進路の幅の広がり】

修学旅行を終了した学生は、今回の体験を通して[障害者分野で働きたいという気持ちが強く

なった] など《障害分野への志望の高まり》が見られるようになった。また「障害者だけでなく障害児もありかな」という《障害児教育への興味発生》という新たな道への関心も生まれ、結果的に学生の【進路の幅の広がり】に繋がっていた。

2 カテゴリーの関係性

学生は、最初に障害児への【関わりの難しさ】に直面し、接し方や意思疎通に困難を感じ、どうすればよいか分からない状況を体験している。

そして、その戸惑いや難しさを実感しながら、【障害児と共に社会参加】するという日常では得られない体験を通して、共に過ごす時間を経る中で障害に対する考えを深めていた。また【教員が教育・指導する姿】からは、福祉の学びでは機会が少なかった教育という視点に触れ、対象者のために厳しさも必要という教育・指導の重要性を学

んでいる。

【保護者の存在】からの学びでは、家族への支援の必要性を再認識するだけでなく、保護者の生徒への思いという内面的なことも意識するようになっていた。

【関わりの難しさ】は修学旅行同伴だけでなく、実習等で重度の障害児と関わる中で経験しうることだが、【障害児と共に社会参加】【教員が教育・指導する姿】【保護者の存在】は、修学旅行という非日常の体験から得られた学びである。

学生は上記の体験と学びを通して、生徒に対して【支援だけではない視点】を持って関わるようになり、さらに【障害に対する新たな気づき】を持てるようになっていた。そこから【修学旅行の意義】を認識するようになり、また【進路の幅の広がり】という自身の将来に対する志望や興味の広がりに繋げていた。

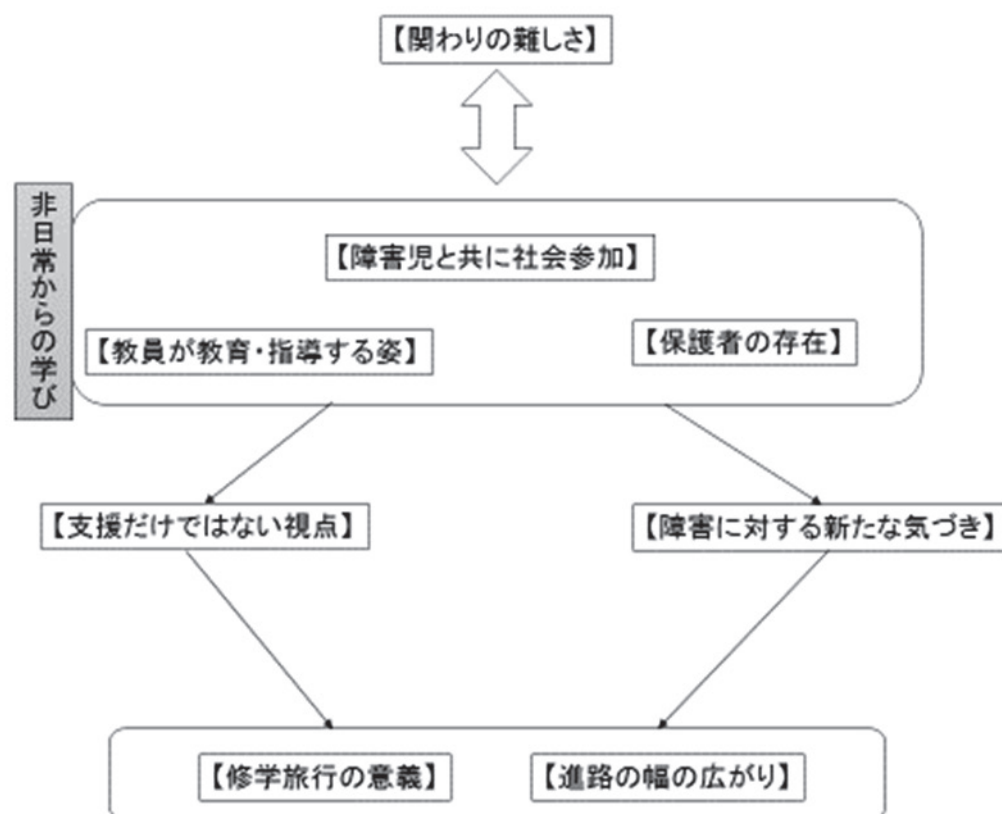


図1 修学旅行同伴ボランティアを体験した学びのプロセス

VII. 考察

1 非日常からの学びの発展

福祉を学ぶ学生は講義や実習を通して、ノーマライゼーションの理念や、対象者の自立支援、意思の尊重に基づいた援助のあり方・方法を学んでいる。しかし、大学では障害者福祉や児童福祉を学ぶ機会があっても、「教育」について学ぶ機会が少ない。そのため学生は、障害「児」に関する知識が乏しく、ボランティアを行うまで障害児と関わりをもつ経験が殆ど無い学生もいた。さらに、学生は社会福祉や介護福祉の実習では、障害児の保護者と一緒に過ごすことは殆どない。

しかし、修学旅行の同伴では、保護者も長時間一緒に過ごし今まで知り得なかった保護者の思いに触れ、障害児を支える上でも保護者の存在が大きいことを知った。また教育など学校の間や保護者との連携の実際について、教員の動きや会話の中から知っていることが分かった。

また、学生は【障害児と共に社会参加】するという日常では得られない体験を通して、障害に対する考えを深めていた。《日頃には見えない生徒の姿》は、学校や日常の生活では見ることのなかった生徒の様子であり、学生は、障害児が社会に参加することへの影響を感じていたと考える。同時に学生自身も《見られる側の違和感》を体験し、障害児と社会の関係を自身の身に置き換えて考えられるようになったといえる。

巡（1997：63）は、本来、児童の“個”のより調和的なより豊かな発達を促進していくためには、三つの推進力＝三つの集団の間（家庭・学校・地域社会）が不可欠の要素である。そしてこの三つの集団の間は、各々が代替のきかない独自の機能、力動性を有していると述べている。

家庭と学校が協力しながら、社会への参加を行う“修学旅行”という環境の中で、実際に障害児やその保護者や教員と関わり、学校や施設以外の場で自分が今まで経験した事がない体験をすることで知識やスキルを習得し、障害の捉え方や障害児・者への支援のあり方を修正拡大し、追加して

いることが分かった。

つまり、「非日常からの学び」を通し、今まで座学だけでの学習では得る事ができなかった新たな知識や考えを手に入れていることが示唆された。

2 学生の体験から得た学びと成長

薄井（2011：125）はナイチンゲールの言葉を引用し、看護師が持つ患者への関心として、その事例に対する知的な関心、その患者に対するもっと強い心のこもった関心、その患者の回復やケアに対する技術的、実践的な関心と、三つの関心を挙げている。福祉を学ぶ学生は、対象者を理解し個々に応じた支援を考え実践する方法を学んでいる。そのためには対象者への関心を持つという姿勢が重要となる。

修学旅行同伴ボランティアを体験した学生は、障害児と共に社会参加しながら、各々が関わった障害児の支援方法のみならず《日頃には見えない生徒の姿》や《生徒への保護者の思い》を知り、《生徒の変化に喜びを感じる》や《障害者分野への志望の高まり》がみられた。これらの認識の変化は、学生の対象者に関する関心が深まったからだと考えられる。

修学旅行同伴ボランティアの体験は、1～4日間と限られた期間であった。しかし、学生はその間に対象者である生徒に対して、薄井が挙げている三つの関心を深めているといえる。

また、松尾（2011：35）は、精神的成長とは、単に自分の力を伸ばしたいという「自分への思い」を持つだけでなく、対象にも喜んでもらいたい、役立つ仕事がしたいという「他者への思い」を持つようになることであると述べている。

本研究の結果では、修学旅行同伴ボランティアの体験と学びから得られた【障害に対する新たな気づき】【進路の幅の広がり】は、学生が自分自身に向けた思いである。一方【支援だけではない視点】は、《生徒の変化に喜びを感じる》《成長期にふさわしい関わり方》が必要という、学生の

生徒に対する思いであり、これは松尾が述べている「他者への思い」と同じものであると考えられる。ここから学生は、精神的に成長していることが示唆される。

VIII. まとめと研究の限界

4年制大学で福祉を学ぶ学生は、修学旅行同伴ボランティアという【障害児と共に社会参加する経験】を通して、学校での勉強だけでは学ぶ事ができない【保護者との関わり】や、【教員が教育・指導する姿】と出会い、新たな知識や考えを手に入れていることが示唆された。また、経験したことを内省することで、【支援だけではない視点】を身につけ、【障害に対する新たな気づき】を得て、【進路の幅の広がり】に繋げており、精神的に成長していた。

今回の調査は、調査対象が少なく、かつ4年制大学で福祉を学ぶ学生に焦点を当てたものであり、この結果を学生全般に一般化できるものではない。また、調査対象者の実習やボランティアなどの経験や、回生による相違点については明確にできていない。

文献

馬場由美子・島かおり・大宅顕一郎 (2005)「学生のボランティア活動と社会的スキルの変化に関する一考察」『永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要』第36巻 155-162.

中央教育審議会 (2002) 青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について (答申).

橋本勇人・別惣淳二・豊山大和 (1998)「介護福祉士養成と福祉ボランティアの関係—介護福祉士養成制度発足以来の卒業生を対象とした調査を通して—」『川崎医療福祉学会誌』第8巻 No. 2.

「平成28年度 高知県の特別支援教育資料」

(<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/311001/files/2016082200236/28siensiryoutentai.pdf>).

「高知県立特別支援学校再編計画【第一次】」

(http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/311001/files/2010012200068/2010012200068_www_pref_kochi_lg_jp_uploaded_life_28570_60858_misc.pdf).

松井みさ・谷本満江 (2011)「ボランティア活動における学生の意識変容について (Ⅱ) — 2年間での学生の意識変容 —」『中国学園紀要』第10巻 215-225.

松尾睦 (2006)「経験からの学習—プロフェッショナルへの成長プロセス—」同文館.

松尾睦 (2011)「職場が生きる人が育つ経験学習入門」ダイヤモンド社.

社会福祉法人大阪ボランティア協会 (1997)「基礎から学ぶ ボランティアの理論と実際」中央法規.

高橋緑・狩野徹 (2014)「自然観光地における障害のある人の団体旅行のサポートに関する研究—福祉を学ぶ地元学生の参加のメリットと課題—」『福祉のまちづくり研究』第16巻第1号 1-9.

寺山節子 (2008)「ボランティアが及ぼす教育効果の実際—学生の主訴を中心に—」『中国学園紀要』第7巻 95-99.

津軽屋恵・石川隆志・高橋恵一ほか (2010)「障害者旅行へ同行した学生のボランティア活動に関する一考察」『秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要』第18巻 第1号 64-7.

薄井坦子 (2011)「科学的看護論 第3版」日本看護協会出版会.

